

第28話・キャバクラでの惨劇

田端光男は、東京都の西部にある小さな街、仁紫（にし）市にある運送会社でドライバーとして働いていた。

仁紫市中央卸売市場の朝は、とても早い。深夜のうちに運び込まれた大量の商品がセリにかけられるのは、朝6時半からだ。前日にスーパーや外食産業から注文を受けた仲買人たちが、次々と商品を買って付けていく。それをコンテナに積み込んで、田端が4トントラックで配送していくわけだ。いわゆる、ルート配送である。

田端が担当しているのは、地元のスーパーマーケットチェーンの青果便とグロサリー便である。

朝6時に出社して、まずトラックの点検をする。それが終わったら、第1弾の荷物を4トントラックに積み込んでいく。大量の荷物が積まれたコンテナの上げ下ろしはかなりハードだ。毎日へとへとになってしまいうぐらいである。

田端が入社したとき、先輩に絶対守れと教わったことは、法令順守の安全運転と、コンテナが倒れそうになったら支えようとするな、ということだった。コンテナが1本倒れて野菜が全部パーになったとしても、せいぜい損害は1、2万だ。ひっくり返った

としても丸ごとパーになることは滅多にない。スイカや大根や長芋なんかは駄目になるかもしれないが、大根なんかは店の人が半分にかットして売ったりするし、保険だつてある。

それより、コンテナに押しつぶされたら、冗談抜きで最悪の事態もありうる。

大ケガをしたという話は、この業界、そんなに珍しい話ではないのである。先月も、隣の運送会社の運転手が脚の骨を折ったとか言っていたし、先輩も満載のコンテナで大ケガをしたことがあるそうだ。ケガをすると、会社に迷惑がかかる、自分も仕事を休まざるを得ないので、大変だ。だから、危ないと思ったらずぐ逃げろというのが先輩の弁だったが、今のところ、田端は危ない目に遭ったことはなかった。

運転面でも、自分は慎重なほうだと思っている。二日酔いで運転したことは一度もない。元来がそういう性格なのだ。

毎朝、荷物を積んだら、速度オーバー、交差点での事故などにも注意しながら、慎重にトラックを走らせていつて、A店に納入する。A店で荷物を半分下ろし、荷受けのサインをもらつて、B店に行つて残りの半分を下ろす。いったん市場に戻つてまた荷物を積み、今度はC店とD店に荷物を配送する。それで第1弾の配送が終わりだ。

同じようにして、第2弾の荷物を積んでA店から順番に回つていつて、青果便が終わるのが10時半くらい。最後、ぐるつと回つて空きコンテナを回収して市場に戻つてきて、ここで早い昼飯になる。市場に隣接した食堂があつて、そこは市場関係者で始終にぎわっているが、田端はあまり利用したことがなかった。あれ

これ話しかけてくる人が多く、そういう人間を相手にするのが田端は苦手だった。なので、大抵はトラックで、ぼそぼそとコンビニ弁当なんかを食べる感じだ。

食事を終えたら、今度は物流センターに向かう。

これはグロサリー便というもので、レトルト食品やインスタント食品、洗剤とか文具とか嗜好品とか、スーパーの棚に並んでいるもの全般である。これは、チラシの入るような大型セールがあるどぐつと物量が増えて、何度も往復することになる。特売は週末が多いので、金曜日あたりは大変だ。

特に重くてトラックやコンテナの取り回しが大変なのは、ペットボトル飲料である。ぎっくり腰に注意しろ、と言われる流通業界の危険物だ。逆に楽なのはカップラーメンで、これは場所をとるわりに非常に軽い。特売はカップラーメンばかりにすればいいのにといつも思っているぐらいだ。

ちなみに、日配品と呼ばれる商品は、運送会社とは別のルートで入ってくることになる。豆腐や納豆、牛乳、生ラーメンや菓子パン、プリンやヨーグルトなどだ。そういったところは、製造会社が独自のルート網を持っていることが多い。商品をつくって店舗に製造するまで、自分たちでやっているのである。道で見かける食品メーカーのトラックは、そういった商品を運んでいると想像すれば大体合っている。賞味期限が短い商品が多いので、いちいち仲買を通していたらロスが多くて商売にならないのだ。

それで、グロサリー便が各店舗一通り終わったら、空きコンテナの回収にぐるっと回って、それを青果市場や物流センターに返

却に行く。そして会社に戻ってきて、軽く洗車をして報告書を書いて仕事は終わりだ。

朝6時から働いて、定時は午後3時、遅いと午後5時くらいまでかかる。かなりハードな仕事で、休みは週に一度、それで月給は25万くらいだ。

転職を考えないでもなかったが、一人でする仕事なので、楽は楽である。仕事で一番大変なのは、長時間労働でも低賃金でも肉体疲労でもなく、人間関係だと田端は思っていた。聞くところによると、24時間やっているコンビニの配達などはもつと仕事が大変らしいし、毎日いろんな人間を相手にする宅配業なんかも別の意味で大変なようだ。毎日、同じ店の同じ担当者を相手にしていればいい自分は、まだいいほうだ。

田端に特に趣味はなく、休みの日は何をすることもない。た。ごろごろしてマンガを読んだり、テレビを見たり、そのくらいだ。

唯一の楽しみは、2ヶ月にいったぺんくらい、町へくりだしてキヤバクラに行くことである。金持ちではないし、とりたてて二枚目でもないし、足繁く通っているわけでもない。当然、相手にされない。ただ、普段の生活で女の子としゃべる機会がまったくないし、恋愛経験も皆無なので、せめてそういった擬似恋愛でも楽しみたいと思って通っていた。

ただ、飲みに行っても酔うほどには飲まない。仕事柄、というのもある。アルコールが残っていたら運転できないし、二日酔いにならないように飲む習慣ができているからだ。しかしそういつ

たこと以上に、むなしくなるからだ。いや、楽しく飲んでいる最中はいい。陽気な酒だと自分でも思っている。しかし帰ってきて一人になると、反動で空虚になる。むなしくて、悲しくて、泣きたくなくなってしまふのだ。

自慢ではないが、32歳のこの年まで童貞である。

彼女がいたこともないし、キスをしたこともない。はるか20年ほど前、学生だったころ、フォークダンスか何かで手をつないだことはあるような気がする。とにかく女の子と接する機会が絶望的ないのだ。

もともと、周りが女の子ばかりの職場だったとしても、彼女や友達ができるかという疑問だ。若いころは、彼女が欲しいと思っただけであれこれじたばたしてみた。しかし、それが無駄だと悟ってからは、半ば諦めに変わっていた。別に童貞だっていいじゃないかと思う。セックスして結婚して、そんな人生ばかりが正しいというわけではないだろう。そんなふうに分をごまかして、諦めていたわけだ。

32年間生きてきて、何もいいことはなかった。

心底、うれしかったこと。あるいは、悲しかったこと、面白かったこと、悔しかったこと、興奮したこと。そんなものは一切なかった。

ただ、あくせく働いては無為に消費するだけの人生で、ばかばかしいと思わなくもなかったが、なるべく深く考えないようにし

ていた。考え始めると、むなしくなるからだ。考えるのは昔のことばかりで、回顧主義というか、最近では小さいころのことを思い出してはただ懐かしんでいた。

あのころが、人生で一番幸せな時期だったのかもしれない。

毎日、故郷の川や、小学校の校庭で遊んでいた。

何も悩むことはなく、夕暮れまで駆けずり回っていた。トンボを捕まえたりシロツメクサで冠をつくったり、駄菓子屋で買ってきたおもちゃで遊んだり、危険だからという理由で今は撤去されてしまった校庭の遊具で遊んだり、理由もなくただじっと川や海を眺めていたり、ジャングルジムで鬼ごっこをしたり。退屈など感じたことはなかったし、人生の苦悩は影すらなかった。

だが、小学校に上がって組織の一員になったときから、それは徐々に田端の上のしかかってきた。

自分の容姿の悪さに気付かされ、体力や学力や人間力によって徐々に選別や差別が始まっていった。

最初は、ほんのちよつとの差だったのかもしれない。しかしそれが、中学校、高校、大学といくにつれて、巨大なものに変わっていった。少しずつ置いていかれ、どんどん離されて置き去りにされてしまう。競争原理というやつだ。そして、就職するとそれは絶望的なものになった。そこが、概ね終点だからだ。

最初があがいて、何度か転職をし、環境を変えることによって世界を変えようと思った。しかし、何一つ変わらなかった。田端

光男という人間の限界が、ここにきて自分にもはっきり見えてしまったのだ。

つまり、田端はもう、自分の人生に見切りを付け始めていた。

もう、自分にはこれ以上にはなれないに違いない。だけど、それを直視しようとはしなかった。真剣に考えると怖くなるし、その答えは、あまりにも悲しいからだ。

§

きっかけは、インターネット上の求人広告だった。

ある休みの日の昼、田端はアパートの部屋で、コンビニのざるそばを食べながら大手検索サイトでデイリーニュースをチェックしていた。そのときだった。本気で転職を考えているわけではなかったが、目立つところにバナーが張ってあったので、何となくクリックしてみたのだ。

会社名、藤王ホールディングス。

新規プロジェクト起ち上げにつき、スタッフ募集。

業務内容、組織マネジメントに係る業務全般。

勤務地、藤王市。

22歳以上の男子。

週休2日、給与18万以上、

福利厚生各種あり。

募集は1名。

給料は安いが、そこまでは普通だった。しかし、最後の一文が田端の心に突き刺さったような気がした。

「人生に意味を感じない方、情熱を何かにつけたい方、友達も彼女もいない方、私たちの仲間になって、一緒に頑張ってみませんか」

ディスプレイの文字を、田端は何度も追った。

それは、まさに自分のことだと思った。ほかの求人と比べても給与はだいぶ低い。ここからあれこれ引かれたら、手取りは相当低いかもしれない。だが、妙に心に響いてくるものがあつた。どうにも気になつて仕方がなかつた。何かを変えるきっかけかもしれない。それがこれなのかもしれないと、田端は思った。面倒だからほうっておこうと思わないでもなかつたが、それだとならずと今のままだ。

ずっと、今のまま！

それは、恐怖でもあり悲しみでもあつた。

動こう。話だけでも、聞いてみよう。そう考えて、田端は思い切つてエントリーしてアポイントメントをとつた。自分にこんなアクティブな部分が残つていたなんて、田端は驚きだつた。しか

し何かちよつとでもいいから、今の自分を変えてみたい。そんなふうにしたし、お金の問題ではなく人生の問題だから、頑張る理由はあるように思えた。

∞

藤王ホールディングスは、東京都西部のごく小さな市、藤王市にあった。

田端の住んでいる仁紫市から、電車で30分程度である。3年くらい前に何かの用事で行ったことがあったが、駅前にすらせいぜい2階建ての建物しかない、小さな町だった。確か当時は藤山市という名前だった気がする。都心からだいぶ離れていることもあり、駅前にはコンビニとラーメン屋、郵便局と銀行とJAの支所があるくらいで、田舎もいいところだった。仁紫市も都会ではないが、一応、人口は数十万人いる。藤山市は、確か5万人とか6万人とか、そのくらいだったはずだ。

小さな町の、小さな会社。

そんな感じだろうと田端は電車で揺られていったが、その予想は藤王駅に着いた時点で間違っていたことを悟った。

以前は、無人駅かと思うくらい小さい駅で、自動改札も2カ所ぐらいしかなかったはずだが、今はものすごく大きな駅ビルが建っていて、2階からは新幹線も出ていた。都心ほどではないにし

ても、人並みはかなり多い。間違えて別の駅に降りたのかと思っ
たが、間違いなく藤王駅の看板が出ていた。

(?????)

広い改札を抜けて、人の流れに沿って歩いていって、幅広の階
段を上る。

そして建物を出ると、以前の藤王駅前とは比べ物にならないほ
ど発展した光景がそこにはあった。いかにも、若者の町という感
じだ。きれいでにぎやかで、若い子がいっぱい歩いている。騒々
しい都会の喧騒だ。

(あれえ…?)

ペDESTリアンデッキがどこまでも広がっている。

きちんと整備された広い道路がずんと正面に伸びていて、そ
の両脇に巨大なビルがいくつも建っていた。奥のほうはまだガン
ガン建設中だ。

(こんなんだったつけ…)

駅の入入り口には、日本人で初めてアカデミー賞の主演女優賞
に選ばれた葉山カオリの大きな看板があって、「スポーツと商業の
まち、藤王へようこそ」のメッセージが記されている。

その下に掲示板があって、人垣がある。何となく近付いていっ
て覗き込んでみると、イベント情報だった。本日お勧めのグルメ

情報。あるいはスポーツイベントの実施要綱。映画や舞台のお知らせ。観光客向けに、ずらっと並んでいる感じだ。イベントの宣伝部隊や、コスプレでチラシを配っている子なんかもいる。ここに来れば今日は何をして遊ぶか、見つかる感じだ。

(うーん…)

再開発、というレベルではない。

誰かが藤王市をすべて買い取って、全部更地にしてそれからきちんとした都市計画に基づいてまちづくりをするような、そんなゲームみたいなことをしないとできないのではないか。

しかし、そんなことをするのに一体いくらかかるだろう。お金だけではなくさまざまな問題も絡んでくるだろうから、現実的にできるとは思えない。なのに、田端の眼前には巨大な街並みが広がっている。白昼夢でも見ているのだろうか、田端は思いながらゆっくりと歩いていった。

(ええと…)

藤王ホールディングスの位置は地図で見てきたが、田舎の駅前だからすぐ見つかるだろうと思っていた。

しかし今は高層ビルが乱立していて、2次元だった町が3次元の都市になっている。どこぞのビルの5F、とかだったら探すのはけっこう大変かもしれない。田端はそう思ったが、駅前の一番大きなビルに藤王ホールディングスの看板が出ていて、探すまでもなく見つけた。駅前も駅前だ。自社ビルらしい。かなり大き

な会社のようだ。

これで給料18万はどうか、田端はそんなふうに思
いながらデッキを歩いていった。道路は片側4車線だが、交通量
は少なかった。バスとタクシーばかり走っている印象だ。

その道路の上のデッキを通過して、ビルの前で階段を下りて正
面玄関から入る。小さなホールで、入口の正面の壁に大きく会社
のロゴが描かれていた。そこにシンプルな受付があつて、とびき
り美人の受付嬢が2人座っている。ゆるふわの可愛い子と、ショ
ートカットのクールな子。とにかく、美人である。

「いらつしやいませ。本日はどのようなご用件でしょうか」

ゆるふわの子に、まさしくウグイスのような声で言われる。

「あ、田端と申します。ええと、14時から、社長室のナカムラ
さんという方に時間をとつていただいていると思うのですが…」

田端が告げると、ゆるふわの可愛い子がメモを見せながら隣を
見て、ショートカット美女がすつと立ち上がった。

「承っております。こちらへどうぞ」

「あ、どうも…」

エレベーターの前を通過して、静かなビルの奥へと細い通路を案

内される。

すぐに、小さな応接室に通された。誰もいないが、空調は効いて快適だった。どうぞと促されてソファアに座ると、しばらくお待ちくださいと言ってショートカット美女は尻を振りながら出ていった。

キヨロキヨロと見回してみたが、10畳くらいの小ぢんまりした部屋に、ソファアとテーブルが置いてあるだけだ。あとは、クリーム色の壁に絵がかかっているぐらいである。エンボス加工の天井を見上げて、きれいに磨かれた床を見る。何だか緊張して落ち着かなかった。

久々に着た一張羅のスーツが、ちよつとかび臭い気がする。ネクタイを締め直していると、がちやりとドアが開いて、コーヒーに乗せたお盆を手には若い男が入ってきた。そのあとから、メガネ美女も入ってくる。

「ええと、コーヒーとお茶と、どっちがいいですか」

若い男が聞いてくる。

「あ、ええと、じゃあ、コーヒーで…」

「どうぞ」

メガネ美女は田端の正面に座った。

若い男は、田端とメガネ美女の前に飲み物を置いて、いったんドアのほうに戻ってダンボールを抱えてくると、メガネ美女の右

側の床に置いた。ぐるっと回ってメガネ美女の横に座る。どことなくのほほんとした男で、あまり優秀ではないように見える。年齢的には、メガネ美女より下だろう。新人かもしれない。

一方、正面に座ったメガネ美女は、きりつとした目鼻立ちをした優秀そうな女性だった。懐に手を入れて立派な革製のケースを取り出し、名刺をさっと取り出して田端に差し出してくる。シンブルなデザインの名刺に「藤王ホールディングス 社長室秘書長 仲村美月」と書かれてあった。

「仲村です。社長室付けではありませんが、人事・組織全般を任されております」

「あ、すみません。田端です」

慌てて名刺を受け取って、田端はぱつと懐から履歴書の入った封筒を取り出した。

両手を伸ばして差し出すと、美月は丁寧に受け取って中身を取り出し、ざっと目を走らせていった。特に目に付くような部分はないだろう。せいぜい、大型免許を持っているくらいだ。

「弊社に入社するかどうかは別にして、とりあえず、いろいろお話を聞きたいということですね」

真面目な顔で、美月は聞いてきた。

頭の良さそうな、巨乳のメガネ美人。長い髪を後ろでラフに束ねていて、すごくいいと思った。25歳くらいだろうか。きりつ

としていて、スーツをびしっと着込んで、田端の周囲にはまったくないタイプというか、違う世界の人間に思えた。つまり、エリートだ。一流の人間、一流の美女である。多分一生無理だと思いが、一度でいいから、こんな女性とセックスがしてみたい。

「今は仁紫市にいらっしやるんですね」

美月に聞かれて、田端は膝を正した。

「はい」

「運送会社にお勤めで、トラックの運転手をなさっておられる」

「はい。そうです」

「長距離ドライバーではないのですね」

「地元のスーパーを回っております。主に野菜や食品を納品する仕事です」

返事をする、美月はダンボールからバインダーを取り出して何かメモし始めた。

「お車はお持ちでしょうか」

「いえ」

「お住まいは、賃貸ですか」

「はい」

「失礼ですが、お付き合いなさっている方は」

「ええと、いません…」

「と、いうことは、仮に弊社で働くことになったとして、藤王に引越してきても問題はない」

「あ、そうですね、はい」

なぜそんなことを聞かれるのかと思ったが、そういう意味があったようだ。

プライベートまで気を遣ってくれるなんて、いい会社なのではないか、田端は思った。受付の子は2人とも美人だったし、美月もインテリ美女だし、そういうった意味でもいい会社だ。こんな美人と付き合えるとは思わないが、わざわざキャバクラにいかなくても、もしかしたら、女の子とあれこれおしゃべりできるかもしれない。

「あ、でも、仁紫市だとわりと近いのかしら…」

「ええ。通勤圏内です」

「電車で20分くらい？」

「30分ちよつとですね」

「そうですか。でも、往復1時間はもったいないですね。年間何百時間も電車で揺られていることになりますから、でしたら思い切って引越したほうがいいでしょう」

こういう考え方が、エリート的に思える。

「今のお仕事と比べて、お給料は下がりませんか」

「あ、ええ、まあ…」

「下がる」

「はい」

「今の職場に不満が？」

「あ、いえ、そういうわけではありません」

「もつとお給料のいい求人が、たくさん出ていますよね」

「はい」

「それでも何か、田端さんの琴線に引っかかる部分が弊社にはあった」

「そうですね。こう、何かしてみたい、という…」

「その、何かというのは？」

美月がぐっと身を乗り出してきたが、自分でもうまく表現できない。

ずっとこの胸に抱えてきたモヤモヤは、なんなのだろう。欲求不満なのだろうか。とにかく、何かを思い切りやってみたい。まだ自分は全力を出せていない。出していない、ではなく、出す場所がないのだ。

「それは、なんでもいいんです。こう、一生懸命頑張って、やりきって、それで達成感を感じたいというか…」

「それが、今の生活にはない」

「ないですね。今までずっとなかったです。何となく生きてきた感じで…」

「弊社にすれば、それが得られると思った」

「根拠はないですけど、心に引っかかりました。あの、人生に意

味を感じない方、情熱を何かにぶつきたい方、っていうのがすごい響いて」

「友達も彼女もいない？」

「そうですね…」

「分かりました。と、いうことですが」

美月がバインダーにペンを走らせて若い男を見た。

若い男は、軽くうなずいて手を差し出してきた。よく分からないが、半ば反射的に、手を伸ばして握手する。男の手は、しっかりととしていて大きかった。見かけによらず、がっちりとしていて力が強い。

「よろしくお願いします。社長の玉川です」

「あ、よ、よろしくお願いします」

さすがに、田端はびっくりした。まさか、彼が社長だとは思わなかった。どつちかというと、営業をサボって釣りばかりしているような人間に見えるのだが、この若さで、この大きなビルの会社の社長らしい。

「今、額面でいくらぐらいもらってます？」

「あ、ええと、25万くらいです」

「ではうちは、とりあえず、その倍出しましょう。僕、ちょっと大事な会議を抜けてきちゃったんで、すいませんがこれで失礼します。細かい条件は美月さんに詰めてもらってください」

「あ、はい、ありがとうございます…?」

何だか、急すぎて頭がついていかない。

玉川が立ち上がって部屋を出ていった。倍ということは50万だろうか。倍というのはそういう意味だと思いが、何だか実感はなかった。

確か18万だという話だったのに、一体どうしてそうなったのだろう。田端をだまそうとして、でたらめを言っているのではないか。あるいは、悪徳商法みたいなことをさせられるのではないだろうか。何だか、藤王市に来たときからずっと夢を見ているような気がする。

「ね、ネットには18万って出てましたけど…」

思い切って聞いてみる。美月はバインダーにカリカリ何かを書いていて、田端を見て口角を持ち上げた。

「18万以上、ですね。間違っではないのでしょうか？」

こともなげに、美月は言った。それから、バインダーとペンを

田端のほうに差し出した。入社契約書と書かれている。

「その代わり、田端さんには大事な仕事をしてもらいます」

言いながら、美月はダンボールから機械を取り出した。

機械、としか言いようがない。見たこともない機械だ。いわゆるデスクトップパソコンの本体、あれを半分ぐらいの高さにした感じで、機械というよりは金属の箱という感じがする。コードが2本ついていて、1本は電源コード、そしてもう1本の先端にマイクみたいな形状の物体が付いている。棒の先端に、小さなパラボラアンテナが付いている感じだ。

それを見て、田端は何となく察してしまった。

これは、多分、ネズミ捕り機とかゴキブリ除去機とかだ。あるいは高周波で汚れを落とすやつとか、とにかく、数十万円ぐらいする怪しげな商品なのだ。これを、営業部隊の一員として、訪問販売させられるに違いない。完全にブラック企業だ。洗脳みたいな厳しい研修を受けさせられて、それで、ノルマを達成できなかったらみんなの前で上司に罵倒されて…。

「これは、簡単に言えば催眠マシーンです」

しかし、田端の予想に反して、美月はそんなふうに説明した。

く以後は本編でお楽しみください